

2008年度第8回物学研究会レポート

「美術館が街を変える」

蓑 豊 氏

(サザビーズ北米本社副会長、金沢21世紀美術館特任館長、大阪市立美術館名誉館長)

2008年10月30日



BUTSU GAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

この度ご登場いただいた蓑豊さんは、「アートが街を変える」ことを見事に実証された人物です。蓑さんは現在、世界最大のアートオークション会社サザビーズの北米本社副会長を務める傍ら、金沢21世紀美術館、大阪市立美術館の運営にも関わっておられます。特に、SANA Aの建築でも話題となった金沢21世紀美術館は、金沢市民に愛され、集客力のある美術館として高く評価されており、その基礎を築いたのが蓑さんなのです。

そんな蓑さんに、「美術館が街を変える」と題し、アートの魅力、アートのある生活、アートの楽しみ方、アートがなぜ感動を生むのかなどなど、アートを丸ごと語っていただきます。以下はそのサマリーです。

「美術館が街を変える」

蓑 豊 氏

サザビーズ北米本社副会長、
金沢21世紀美術館特任館長、
大阪市立美術館名誉館長



01 ; 蓑豊氏

●金沢21世紀美術館が目指したこと

蓑豊です。本日は黒川雅之さんからお招きをいただきやってきました。私は現在ニューヨークを拠点にしていますが、日本には時々帰国していて、大学や経済界などでアートについて話すことが多いです。そこで感じるのは、日本の地方都市がとても寂しい状況にあるということです。現在、地方は財政や人材面で課題を抱えており、何とか元気になりたいと願っています。私が館長を務めた金沢21世紀美術館がある石川県金沢市も同様の問題意識を持っていました。そこで本日は、同美術館のアートの取り組みをお話する中で、アートが街づくりにどのような効果をもたらすのか、人々の生活にどのような彩りを与えてくれるのか…そんなことを考えてみたいと思います。

・子どもが集まる美術館

そもそも私がこの美術館プロジェクトに関わるようになったきっかけは、当時の山出保市長が金沢を文化都市にしたいという強い意志を持っていたことです。その情熱に私も共鳴して、では現代美術を鍵に街興しをしていきたいと思いますということになりました。金沢は、皆さんもご存知の通り、日本を代表する伝統工芸の街であり、人間国宝もたくさんおられる。戦災にも遭ってなくて美しい街並みも多く残っている。ですから、正直なところ「なんで現代美術なの?」「現代アートなんて良く分からない」ということで、反発もありました。そこで浮上したのが「子ども」だったので。

なぜ、子どもなのか? 私は26年間、アメリカとカナダで美術館運営の仕事に携わりました。欧米では、美術館は街のシンボルであり、税金と寄付金で運営されているので、市民の誇りであり、生活の一部として定着しています。ところが日本はそうではない。私は約11年大阪市立美術館の館長を務めながらその理由を考え続けたのですが、日本人は子どもの頃から美術館に行っていないのではないか、と気づいたのです。つまり、子ども時代に美術館に行っていないと、自分の子を美術館に連れて行くことはない。逆に子どもの頃から親と一緒に美術館に来てると、その子が親になったときに子どもと一緒に美術館にやってくるのです。これはヨーロッパのある統計でもはっきりしています。

特に現代美術は、子どもの頃から「こんなに楽しいものだ」と、親と一緒に楽しむことがとても大切です。そこで、せっかく新しい美術館を創るのであれば、子どもと一緒に成長する美術館を実現したいと考えたのです。大阪市立美術館長時代、私が大好きなクールベという画家の展覧会を行った際、ある小学校の校長先生をお願いをして、120名ほどの小学5年生に来てもらったことがありました。ところが、多くの子どもは絵の前をほとんど素通りして外で遊んでいる。これではまずいと思って、今度は何種類かの絵はがきを子どもたちに1枚ずつ渡して、印刷されている絵を見つけてその印象を書いてもらうことにしました。そうしたら、皆、真剣に作品を探し回って、きちんとした感想を書いてくれました。驚いたのは、95%の生徒が美術館は初めてだったということ。美術に携わる者として、すごく悲しかった。この経験から、金沢では「子どもを美術館に!」が目標になった。結果的に、この指針が美術館を成功に導いたと思います。

・子どもの感性に響く建物と環境

金沢21世紀美術館の建物の設計は、建築家の妹島和世さん西沢立衛さん。同美術館の設計でベニスビエンナーレの金獅子賞を獲得し、現在は世界的に活動しています。美術館には、5カ所の出入口があり、当初は警備上問題だと指摘されました。しかし人口45万人程度の街ですし、ガラスが主体の建物なのでだれがどこにいても丸見えですから、それが逆に安全、安心であるという効果をもたらしています。そして、この間口の広さが子どもの感性にもすごくマッチしていたようです。

さらに、建物の回りは芝生の原っぱで、中に入って自由に遊び走り回ることができます。せっかくの芝生なのに鉄条網で入れないことも多いですからね。子どもにとっては楽しい環境になっていると思います。

・子どもも楽しめる展示

展示も子どもをはじめとした来館者を第一に、何かしら作品と対話し関係を持てるような作品を世界中から探してきました。中でも《スイミング・プール》が一番人気です。お金はかかっていますけ

ど、アートが放つ本物感を子どもたちは理解できるんですね。映画のセットのような安物で済ませていたら、彼らはここまで夢中になってくれることはなかったでしょう。私は、子ども美術館とか子ども向け展示のようなものは余り好きではないんです。子どもは少し背伸びをしても、お父さんやお母さんと同じ目線でアートを楽しむべきだと考えています。

・子どもを対象に「もう一回券」の発行

こうした狙いは当たりました。同美術館の来館者は4年で564万人以上です。この数字は普通ですと30年かかります。人口45万人の街の美術館にこれだけ入ったのは、本当に奇跡のような出来事なのです。

もちろん、待っているだけではこの数字はあげられません。色々な手立てを打ちました。そのひとつが、子どもを対象とした「もう一回券」です。私たちが頭をひねって考えたのですが、これは「招待券」ではなく「もう一回」というところがミソです。美術館オープン初年度、私は市内の全小中学生4万人を招待し、同時に彼らに3カ月限定の「もう1回券」を配りました。美術館の楽しさを知った子どもたちが、今度は親やおじいさん・おばあさんを連れて来てくれる。もちろん親からは入場料をいただきます。その券には名前と学校名を記載してもらいましたが、4万枚のうち7000枚が返ってきました。こうした対策のお陰か、この美術館はリピーターが多い。こうでないと年間130～150万は入りません。

・無料ゾーン

無料ゾーンが多いことも、同美術館の特徴です。普通は、エントランスにゲートがあって切符を買わないと中に入れない。ここでは、無料ゾーンをたくさん設けることによって、お金を払わなくてもゆったり時間を過ごせますし、展覧会に入るかどうか考える時間をつくっています。結果的には入場料を払ってくれる人は来館者の30%程度ですが、年間150万人の30%なので、現金にして2億円以上の収入が確保できる。

・美術館の経済波及効果

しかし、美術館の経済効果は入場料だけではありません。美術館に来てくれる人は、金沢市にたくさんお金を落としてくれます。鉄道や飛行機などの運賃、食事や買い物、ホテル代など、その経済波及効果は計り知れません。実際に、「創造都市」を研究している大阪市立大学教授の佐々木雅幸さんのリサーチによると、金沢21世紀美術館のオープン初年には328億円の波及効果があったそうです。美術館建設には土地取得や建物に200億円ほどかかっています。しかし、地元への経済効果は計り知れないし、街づくりや活性化にも大きな役割を果たしたと言えるでしょう。

・文化が街を元気づける

欧米で生活していると、美術館や大学の存在が街の活性化にいかにか大きく貢献しているかが分かります。大学であれば、図書館やホールが市民に開放され、文化の拠点になっています。何より、若者がいることによって街全体が活気を帯びるのです。ところが、日本では大学の多くが地方や郊外に出てしまって、街中にいなくなってしまった。とても残念なことです。だからこそ金沢では、美術館、いや文化を中心に街を元気づけたかった。文化が創造を生む。文化がないところに創造はない。そし

てやはり人が文化を生む。人がいないところで文化は生まれないと思うのです。この美術館ができたことによって、金沢に人が来てくれるし、市民の感性を育むことにつながるだろう。ひょっとすると将来、ノーベル賞や大きな芸術賞をとってくれる子どもが現れてくれるかもしれない。この金沢21世紀美術館がそんなケーススタディのひとつになってくれたら嬉しい。

さらに言えば、今、私が一番やりたいことは、日本を真の文化国家にすること。そのためには、寄附をしたら税金を免除する、絵画の名作が来るときには国家補償するなどの政策が必要です。この2つの課題は何としてもやり遂げたい仕事なのです。

・美術館の存在を知ってもらう

さて、私は人を呼ぶために宣伝にも力を入れ、破格の金額を投入しました。そのお陰で、現在も尚、来場者数は安定しています。これは宣伝の効果も大きいと考えています。ただ宣伝だけでは不十分で、口コミもとても大切です。そのためには、たゆまぬ工夫と対策が必要です。

私は、最初の記者会見で「年間入場者、30～40万を目指したい」と言ってしまったので、そのプレッシャーは想像以上でした。何と言っても人口45万人の街ですから……。そのための対策のひとつとして、竣工1年前に約200人の旅行会社関係者を一泊二日で金沢に招待しました。残念なことですが、日本の旅行ガイドブックには美術館情報は余り載っていません。そこで、担当者を招待する代わりに、この美術館について必ず1ページ記事をつくってくださいとお願いしたのです。今では2ページで紹介してくれる本もあり、兼六園よりも有名になるかもしれないと内心喜んでいます。

●金沢21世紀美術館の概要

以下、金沢21世紀美術館について、建物や作品、活動などをご紹介します。

・ロケーション

美術館は街の中心にあります。県庁は郊外に移りましたが市役所は至近距離、香林坊という金沢一の繁華街も徒歩圏にあり、兼六園、金沢城という名所が隣接するという絶好のロケーションです。金沢の新駅舎からは徒歩30分ほどですが、道筋にパブリックアートを設置しまして、散歩を楽しみながら来ていただくことができます。

建物全体は丸い宇宙船のような形です。周りは芝生が植えられています。美術館には5つの出入口から自由に館内に入ることができます。ギャラリー部分は箱型の部屋で、その箱の周りはすべて無料ゾーンです。市民に愛される美術館をつくる際には、ロケーションは非常に大切です。

・金沢市内彫刻作品

金沢新駅舎と美術館を結ぶ道を「ミュージアム・アベニュー」として、パブリックアートを設置しています。最初に選んだのは国内外4人の作品です。中でも駅前に設置した《CORPUS MINOR #1》という、一見爆弾のように見える作品は「現代美術は爆発だ!」という意気込みで設置しています。その他、市内のバスターミナルや市庁舎前など、街のポイントにあります。

・美術館建築

全館バリアフリーで車椅子でいつでも入れます。ギャラリーは大小様々なサイズがあり、展示会の内容によって自由に組み合わせて使用できます。全部合わせると1400m²、天井も12m、9mと高さが違います。

私はここを市民のための美術館、同時に「応接間」にしたかった。大金持ちでない限り、大きな家を建てて、芸術作品を飾ることはできません。だったら私たちがスペースをつくりアートを飾りますので、いつでもお越しくださいという気持ちです。ですから、無料ゾーンは9時から夜10時まで、月曜日もやっています。夜間まで開ける必要はないという意見もありました。しかしガラスを多用した建物なので、開館中は巨大な公共照明のようで、美しい夜景を創ってくれています。

・ロゴマーク

建物と並んで美術館のもうひとつの顔となるロゴのデザインは、佐藤卓さんをお願いしました。彼は、建物の平面図をそのまま使ったデザインを提案してきて、それに決まりました。私は「妹島さんにデザインの料の半分は渡さないと…」と冗談で言ったんですが、おもしろいデザインになったと思います。

ここで重要なのが美術館のネーミングです。私は最初から、お役人的な「県立」や「市立」が付く名前だけはやめなさいと言いつづけました。「市立」とあるだけで、皆さん来ないですよ。「21」は素晴らしい。「何だかわからない。何があるんだろう？」とミステリーを感じさせる。それと館名の英語表記では、「contemporary」は、英語で書かなきゃいけないと主張しました。そしたらある英語の専門家が「訳、これ、間違っています」と指摘してきたのですが、そういう意見には耳をかさない。もし「金沢市立現代美術館」という名前をつけていたら、いったいどのくらいの人に来たのだろうか？と私は思います。

・建築と一体化した常設作品

先述のレアンドロ・エルリッヒの《スイミング・プール》は、金沢という雪国でハワイへ来たような感じにしてくれます。これは建物の天井部分をガラス張りにして、そこに9センチだけ水を入れて、上と下から眺めるという作品です。上から見ると下にいる子どもたちがまるで水中にいるように見えて、本当に不思議です。この作品が成功した理由は、アイデアはもちろんですが、どうして水面の下に人がいるのか分からないように、離れた場所に階下に行く階段をつくったことも大きい。しかも階上は無料ゾーンですが、階下へ行くには階段がギャラリーの中にあり、入場料が必要です。子どもたちにとって、この不思議の世界への入口を探すことはとても楽しいのです。

ジェームズ・タレルの《ブルー・プラネット・スカイ》は、切り取られた天井から空を見つめるというコンセプチュアルな作品です。一目見てすぐ出てしまう人も多いのですが、15分か20分居るとこの作品の価値が分かってきます。私は嫌なことがあると、ここに座って天空を見つめています。野外に設置されたフローリアン・クラールの《アリーナのためのクランクフェルト・ナンバー3》は、巨大なラッパのようなオブジェが地下でつながっていて、離れた場所でお話ができるという遊び心を盛り込んだ作品です。大人の中には灰皿だと思って灰を捨てる人がいる。とんでもないことです。

フランス人のパトリック・ブランの《緑の橋》は植物の壁です。白色とガラスでできた建物の中庭

に設置された壁に植えられています。植物は普通地面から繁りますが、壁から生えている様が意外で面白い。作家は金沢市近郊で育つ植物をリサーチして、それらを日のあたる面と日陰の面にも配慮して植えています。赤とんぼなども飛んできて、人工の空間と自然が調和しています。

パリ在住の台湾人作家マイケル・リンによる《市民ギャラリー 2004.10.9-2005.3.21》は、金沢の加賀友禅をデザイン化した作品です。作家は1カ月以上滞在して描き上げました。ここは無料ゾーンなので、パソコン持参でオフィスみたいに使っている人もいます。

・子ども体験型の活動

4方向からピンポンができるガブリエル・オロスコの《ピン・ポンド・テーブル》や祭りの輿のようなパトリック・トゥットフオコの《バイサークル》など、子どもたちが体験しながらアートを楽しめる作品なども収蔵しています。

「キッズスタジオ」には、1時間500円～料金で子ども預けられる託児ルームがあります。子どもたちはブロックで遊んだり、お絵描きしながら過ごしています。親の中には、子どもを預けて近くのデパートや美容院へ行く人も居るようで、今、需要がすごく多いんです。

金沢市内の小中学生の無料招待企画「ミュージアムクルーズ・プロジェクト」にも力を入れています。例えば、あるスイスの作家は、子どもたちが金沢の海岸で拾ってきたガラクター—中には中国、韓国から拾ってきた空き瓶やゴミ—を使った巨大なオブジェを制作しました。参加した子どもたちがやってきては自分が拾ったモノを一生懸命探す姿がほほえましい。会館初年度の会期中には4万人近い子どもがきましたが、作品は一度も傷つけられなかった。これもびっくりしました。

・ミュージアム・リンク・パス

金沢21世紀美術館は、六本木の森美術館と直島の地中美術館と同時期にオープンしました。そこで連携できないかという意見が出てきたのです。共通の冊子を用意して、3館回ってスタンプを押したらオリジナルグッズを差し上げるという仕掛けを行いました。

・プロジェクト工房

作家が一定期間滞在して、作品を完成させる場所です。2007年から08年には、日比野克彦さんのプロジェクトを開催しましたが、制作過程を見られるようになっていきます。日比野さんのプロジェクトで、最初工房の周りに朝顔を植える案がでしたが、美術館の周りに植えましょうということになりました。

・明後日朝顔プロジェクト21

2007年5月16日、約500人の中学生とボランティアに参加してもらって、朝顔を植えました。朝顔にはそれぞれ、苗まで育てられた場所を記したネームタグが付けられました。不思議なことに、朝顔も競争するのか、どれもきれいな花を咲かせてくれました。夏から11月まで咲き続けてくれました。もちろん建物の外から見た光景もきれいですが、内側からもまるで緑のカーテンがかかっているようでとても美しかったです。何より、夏季の電気代を大幅に節約できました。11月には収穫祭と謳って、皆で種を集めて、参加の中学生やボランティアに配りました。

・サイトウマコト展

現在、サイトウマコト展を開催しています。サイトウさんはデザイナーとして有名ですが、今では絵描きに専念していてその第一回目の展覧会です。まさに21世紀のアートと呼べるもので、映画関係の人物をモチーフに現在のデジタル技術を駆使した、奥行きが深い作品になっています。11月22日からは杉本博司展が始まります。

・高校数学の教科書

金沢21世紀美術館の全景は高校数学の教科書に見開きで掲載されました。高校生たちが記憶のどこかにとどめてくれて、いつか来館してくれたら嬉しいです。この建物の幾何学的な美しさから、採用されたのだらうと思います。

●アート・インスパイヤー・デザイン

アートの楽しさと同時に、デザインの素晴らしさも美術館が発信しなければならないと考えています。金沢21世紀美術館では、川崎和男さんの展覧会を行いました。彼は今、眼鏡のデザインで世界的に有名になりましたが、彼のデザインはアートに通じる美があります。彼は交通事故に遭って車椅子生活をおくるようになって、東芝を退社し福井に帰ってきて武生のナイフ、鯖江の眼鏡など地元産業の仕事をし、地元にごく貢献したと思います。ナイフはただ切るもの、眼鏡はただ見れば良いという機能以上の魅力を、デザインで描いて見せた。アートに限らずデザインも夢を与えるもの。同時に生活で使うわけですから、毎日使っても飽きないもの。使用者と会話ができるデザイン。そういうことが大切なのだと思います。私たちも美術館からデザインの楽しさを発信したいと考えました。サイトウマコトさんや杉本博司さんも同じだと思います。これからもっと広いジャンルから、そして才能豊かな若い作家を見つけ出していかなければならない。美術館がその役割を果たすべきです。

最後に、皆さんも考えに詰まったときには美術館へ来て、本物を見て、何か良いインスピレーションや影響を得てほしいと思います。良いデザインやアイデアは、机に向かっているだけでは生まれません。良い本を読んだり、素敵な音楽を聞いたり、美術館へ行ったりすることによって生まれることもある。子どもも同じです。ガリ勉するだけでなく、幼い頃から美術に親しみ、感性を培ってほしい。

美術館の存在を、もっと身近に、敷居もない、ふだん着で来られるようにするのが私の夢です。美術館側も努力を致しますので、皆さんも美術館に行く習慣をつくってほしいなあと思います。どうもありがとうございました。

2008年度第8回物学研究会レポート
「美術館が街を変える」

蓑 豊 氏

(サザビーズ北米本社副会長、金沢21世紀美術館特任館長、大阪市立美術館名誉館長)

写真・図版提供

01；物学研究会事務局

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2008 Society of Research & Design. All rights reserved.